

2 年 1 組 国語科学習指導案

場 所 2 年 1 組教室

1 単元名 気持ちを読みとり，音読げきをしよう

2 教材名 お手紙（アーノルド＝ローベル）・「ふたりは」シリーズ

3 単元のねらい

【関心・意欲・態度】

- ・手がかりとなる本文表現を抜き出したりするなど，がまくんとかえるくんの気持ちを進んで読み取ろうとしている。
- ・進んで音読の工夫をしたり，楽しんで音読劇をしたり見たりしている。

【読むこと】

- ・がまくんとかえるくんの気持ちを，台詞や行動描写，地の文などに着目して読み取ることができる。
- ・読み取った気持ちが表れるように，声の大小，速さ，間の取り方，表情や身振り，登場人物の目線・姿勢等に気を付けて音読したり，簡単な劇を楽しく演じたりすることができる。

4 単元における主な言語活動 小学校学習指導要領解説 国語編 p 42 より

「読むこと」の言語活動例のイ

物語の読み聞かせを聞いたり，物語を演じたりする言語活動

物語を読み聞かせてもらったり，それらを簡単な劇にしたりして楽しむ言語活動である。

物語の優れた読み聞かせは，語り手の声そのもの，声の大小，速さ，間の取り方，表情などに触れて，文字などの抵抗なしに文字作品の世界に浸ることができる。読み聞かせによって本や文章を音読する楽しさを知り，自分でも読み聞かせや，身振りを伴った簡単な劇活動を行いたいと思うようになる。このような気持ちを大切に，役割を決めて読んだり，友達と協力して人形劇，音読劇，紙芝居などの簡単な劇を演じたりする活動へとつないでいく。

5 本単元のねらいに関わる学級の児童の実態

(1)関心・意欲・態度（○：できている □：課題である）

- 紙芝居を見ることがや短い絵本の読み聞かせを聞くことは好きな児童が多い。
- 5月に学習した単元「本と友だちになろう」では，「スイミー」の作者であるレオ＝レオニに興味をもち，その作品を進んで読む児童が増えた。

(2)読むこと（○：できている □：課題である）

- 物語文「ふきのとう」の学習では，多くの児童が登場人物の様子を思い浮かべて音読した。
- 地の文に着目し，行動やまわりの様子などの描写から，主人公の気持ちを読み取ることができた。
- 声の大小や間の取り方，表情など，聞き手を意識して音読を工夫する点に弱さが見られる。
- 叙述や挿絵を手がかりに，登場人物の気持ちを読み取る点については，個人差がある。

6 研究テーマに関わって

(1)学習のユニバーサルデザイン化

各場面の挿絵の活用

- ・がまくんやかえるくんの微妙な動作や表情，場面の状況をつかませるために，教科書の中の挿絵を拡大し，黒板や教室側面等に掲示する。
- ・シールや色分けなどの視覚的支援による，台詞の識別
- ・「お手紙」には，がまくんとかえるくんの台詞が交互に登場する。このふたりの台詞を区別して読み進められるよう，それぞれの台詞の箇所に対応したシールを貼らせる。
- ・掲示する台詞の短冊は，登場人物ごとに色分けして掲示する。

(2)協同的に学び合う学習集団の育成

ペア交流の位置付け

- ・本単元では、登場人物の気持ちや場面の様子を踏まえて、工夫して音読することが大切である。そこで、モデル児童の発表から仲間の音読のよさを見つける。それを取り入れた音読をペア同士で聞き評価し合うことで、自分の音読のよさと改善点を見つける。
「がまくん・かえるくんになりきりカード」を活用した、音読のよさを見つけ
- ・音読を聞く視点が書かれた「がまくん・かえるくんになりきりカード」を使って、仲間同士でお互いの音読のよさを見つけ合う。

(3)言語活動の充実を目指した単元指導計画の在り方

指導事項及び言語活動を系統的・発展的に配置した年間指導計画（年間）

- ・1学期は、登場人物の気持ちになって台詞の部分を工夫して音読した。本単元では、「加え読み」を入れて簡単な身体表現も入れた音読をする。3学期は、自分が一番好きなところを選んで音読・劇発表ができるようにする。
第3次を中心とした言語活動の充実（各単元）
- ・本単元で行う言語活動は、音読劇である。グループごとに劇にしたい場面を担当し、グループ内で役割を決め、仲間と協力して音読劇を作り上げる。音読の際には、熟考・評価型の読解である「加え読み」を実施する。「加え読み」とは、「前後の文脈を踏まえた上で、新たに台詞を加えて音読すること」である。このような創造的な読みである「加え読み」をすることで、楽しみながら児童が自分の考えをもつことができる。また、自分なりに「加え読み」をすることができたとき、劇を演じる楽しさも増すと考える。
習得・活用のサイクルを生み出す系統的、発展的な単元構成（各単元）
- ・本単元構想のポイントは、「第3次の音読劇につながるように、第2次の授業をどのように構築するのか」という点である。「第2次の場面読み」と「第3次の音読劇」が分離してしまわないよう、習得・活用のサイクルを生み出すことが大切である。
- ・そこで、第2次では、従来の場面読み（登場人物の気持ちの読み取り）をした上で、授業過程の「深める」過程において、「音読の仕方を工夫し、音読練習をする場」を位置付けた。「音読練習の場」を位置付けたことで、「第2次で音読の仕方を習得し、第3次の音読劇で活用する」というサイクルを生み出そうとした。
- ・音読の視点は「声の強弱（口の動き）・読む速さ・間の取り方など」、動作を取り入れる際の視点は「顔の向きや傾き・手足の動き・視点（立ち座りなど、どの位置にいるのか）」などである。これらの視点は、児童の姿の中にすでに見られるものである。児童が音読練習をする中で、モデルとなる児童を教師が取り上げて価値付け、視点を一覧化する。

(4)協同的な学び合いを通して、読みや表現を深める授業の在り方

児童が見通しと自分の願いをもち、学習を振り返る場の設定

- ・児童が音読の工夫を意識できるよう、音読を発表する場としてペア交流の場を設定し、聞き手の児童には評価の視点が書かれた「がまくん・かえるくんになりきりカード」を持たせる。

言語活動の充実を目指した工夫改善

- ・工夫改善の手立ては、「加え読み」の導入である。「本文には書かれていないがまくんの台詞を自分で考えて追加すること」で、よりがまくんの気持ちを理解できると考える。
- ・児童が、音読の工夫の仕方を学び合うことができるよう、音読の工夫を一覧化した短冊である「音読名人カード」を黒板に掲示する。音読練習の際に指し示すなどして、活用する。
協同的な学び合いを生み出す指導・援助の工夫
- ・協同的な学び合いの場として、モデル児童の発表を位置付けた。モデル児童の音読を聞き、その工夫を学び合う。その後、音読のペア交流をして、ペア同士で互いの音読を評価し合うことにした。こうすることで、より聞き手を意識した音読ができると考えた。

(5)他の活動との関連

音読劇発表会の実施

- ・1・2年合同集会の場で、1年生に向けて「お手紙」の音読劇発表会を実施する。

7 単元指導計画（全 11 時間）

時間	主な学習活動	指導・援助
1 ・ 2	本時の課題を確認する。 「ふたりは」シリーズの読み聞かせを聞いて かんそうを はっぴょうしよう。 「ふたりは」シリーズの読み聞かせを聞く。 範読を聞いた後、感想を全体交流する。	教室にアーノルド＝ローベル・コーナーを設置し、並行読書ができるようにする。教師が、声の大小・速さ・間の取り方などの音読のモデルを示す。 各自が「お手紙」の感想をもてるよう、プリントに記入した後に全体交流する。
3	本時の課題を確認する。 いちども お手紙をもらえない がまくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、がまくんの気持ちを読み取る。 音読の個人練習をしたあと、ペア交流をする。	自身の経験をもとに、どんな気分かを発表した児童がいたら、価値付ける。 音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。 ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
4	本時の課題を確認する。 がまくんに 手紙を書いた かえるくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、かえるくんの気持ちを読み取る。 音読の個人練習をした後、ペア交流をする。	「しなくちゃいけないこと」「大いそぎで」「とび出しました」の言葉をもとに、動作を付けて、「加え読み」につなげる。 音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。 ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
5	本時の課題を確認する。 お手紙をまつのが あきあきした がまくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、がまくんの気持ちを読み取る。 音読の個人練習をした後、ペア交流をする。	本文の対話から、すねて諦めたがまくんの様子や一生懸命説得するかえるくんの様子を読み取り、「加え読み」につなげる。 音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。 ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
6 本 時	本時の課題を確認する。 お手紙のないようを知ったときの がまくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、がまくんの気持ちをを読み取る。 音読の個人練習をした後、ペア交流をする。	「ああ。」「とても いいお手紙だ。」の台詞に着目させ、その理由を考えることにより、「加え読み」につなげる。 音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。 ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
7	本時の課題を確認する。 読みかたをくふうして、はっぴょう会の れんしゅうをしよう。 班で練習後、ペア班で交流する。	「げき名人カード」をもとに、音読する部分と音読の工夫の仕方を個人で決める。 机を後ろにまとめ、劇の練習や発表ができる場所を確保する。 挿絵を用意し、場面全体の雰囲気がつかめるようにする。
8 ・ 9 ・ 10	本時の課題を確認する。 せりふやこうどうから 気持ちを考えて、「お手紙」のげきはっぴょうをしよう。 班練習後、ペア班で発表し合う。 担当班の発表を聞き、よさを発表する。	「げき名人カード」をもとに、音読する部分と音読の工夫の仕方を個人で決める。 机を後ろにまとめ、劇の練習や発表ができる場所を確保する。 背景として挿絵を用意しておき、がまくんやかえるくんの表情や動作などに浸れる環境をつくる。
11	本時の課題を確認する。 「ふたりは」シリーズの ほかのさくひんを 読もう。 シリーズの他の作品を読み、感想を交流する。	作品別グループに分かれて、疑問や感想を交流する。 「ふたりは」シリーズのうち、本単元で読んだ作品数を数えさせ、挙手で確認し、作品数が多い児童を価値付ける。

並行読書（「ふたりは」シリーズなど、アーノルド＝ローベルの作品）

1・2 年合同集会：1 年生に向けて、「お手紙」の音読劇発表会をする。

8 本時のねらい

「ああ。」「とても いいお手紙だ。」という叙述や挿絵を手がかりに、かえるくんの手紙の内容を知ったがまくんの喜びの気持ちを読み取り、「加え読み」などの工夫をして音読することができる。

9 本時の展開 (6 / 1 1)

過程	主な学習活動	指導・援助
つかむ	四場面の挿絵を見て、気付いたことを話す。 Aさん：四場面のがまくんとかえるくんは、一場面のときよりも幸せそうな顔をしている。わけは、きつとかえるくんが手紙を書いたからだと思う。 本時の課題を確認する。 課題：お手紙のないようを知ったときの、がまくんの気持ちを読みとり、音読しよう。	気持ちの変化に気付かせるため、一場面と四場面の挿絵を提示し、比較させる。 ・一場面の挿絵...ふたりとも、悲しい気分 ・四場面の挿絵...ふたりとも、とても幸せな気持ち 叙述に基づいて読み取れるよう、お手紙の内容を黒板に掲示する。
考える	四場面 (P.12 L.6～P.15 L.10) を音読する。 各自、読み取ったことと、「加え読み」の内容をプリントに書く。 全体交流をする。 Aさん：がまくんは、お手紙に「親愛なるがまがえるくん」「きみの親友、かえる。」と書いてあるのを知って、とてもうれしかったと思う。 Bさん：ぼくも、うれしかったと思う。「ああ。」の後には「うれしいな。かえるくん、どうもありがとう。」という台詞を入れたい。 Cさん：がまくんは、「ぼくも親友だ」という気持ちだったと思う。ぼくががまくんなら、「とても いいお手紙だ。」の後に、「かえるくんのことを、ぼくも親友だと思っているよ。」と言いたい。	集中力の続きにくいDさんに対しては、音読の直前に名前を呼び、関心を向かせる。 音読練習の時間を確保するため、四場面のP.14 L.1～P.14 L.11に範囲を絞って読み深めることを伝える。意欲的に取り組めるよう、イラストに吹き出しの付いた学習プリントを用いる。 「加え読み」(前後の文脈を踏まえた上で、新たに台詞を加えて音読すること)をしたい場所を児童に尋ねる。児童と対話する中で、「ああ。」「とても いいお手紙だ。」の後に「加え読み」をすることを確かめる。
深める	各自、音読の工夫の仕方を考える。 Aさん：「とても いいお手紙だ。」の台詞を言うときは、にっこりした顔で言いたい。 Bさん：「ああ。」の台詞は、うれしそうに言いたい。わけは、かえるくんの手紙の内容を読んで、がまくんは幸せな気持ちになったから。 個人で音読の練習をする。 モデル児童の発表を聞き、よさを発表する。 音読のペア交流をする。聞き手は相手の音読のよさを評価して伝える。 Bさん：Aさんは「音読名人カード」に書いてある「うれしそうに」ということに気を付けて音読していたので、です。また、考えた台詞を音読することができていたので、です。それに、にっこりした顔をしていて上手でした。	音読の工夫の仕方が分かりやすいように、あらかじめ予想される音読の工夫をカードにした「音読名人カード」を拡大して、掲示しておく。 「ああ。」「とても いいお手紙だ。」の短冊に添わせるように「音読名人カード」を掲示する。 自分のめあてに沿って、表情(にっこりする等)などの音読の工夫ができていた児童を価値付け、学級に広める。 聞き手に聞く視点をもたせるため、評価の観点の書かれた「がまくん・かえるくんになりきりカード」を用いて相互評価させる。
まとめる	自己評価する。 ア 「音読名人カード」に書いてあることに気を付けて読めましたか。 イ 加え読み(考えたせりふを音読すること)ができましたか。 ウ 友だちの音読のよいところを見つけることができましたか。 教師の評価を聞く。	自分の読み方と、友だちの音読の聞き方に着目して評価させる。 友だちのよい姿を認め合えるよう、教師が見つけたよい姿を価値付け、学級全体へ広める。